

レビュー Review



グーグルが消える日

ジョージ・ギルダー 著 / 武田玲子 訳

SBクリエイティブ
1800円＋税 / 403ページ

profile

George Gilder

1939年生まれ。ハーバード大学卒業後、リチャード・ニクソン、ネルソン・ロックフェラーなどのスピーチライターを経て、サブライサイド経済学の研究者へ転身。通信網の帯域幅に関するギルダーの法則を提唱。著書に『富と貧困』『テレビが消える日』『テレコズム』。

挑戦的な予測だが
明確さ欠く、消える理由

評者 スクウェアイブ社長
黒須豊

本書は、アルビン・トフラー亡き後、最も注目される米国の未来学者の一人が著した意欲作である。

本書のコア概念は、挑戦的な書名が示すとおり、今日のグーグルのビジネスモデルは永続的ではなく、ユーザーに対する巧妙な無料戦略が無効になるだろうという予測だ。

著者は、クロード・シャノンの情報理論によって新たな科学が確立し、これに基づく経済が生まれ、その経済における「世界システム」、つまり世界を圧倒的に支配する普遍的な仕組みを初めて完成させた企業がグーグルだとする。そのシステムは、グーグルが自ら命名したクラウド・コンピューティングが概念として有名だが、致命的な欠陥が存在する。そのため、将来はこれに取って代わる概念であるスカイ・コンピューティング時代が来るというのが著者の見立てだ。

前者は大量データの集中処理を前提とし、ユーザーに対するサービスは原則無料で提供

目次

グーグルが消える日

第1章	まもなく「グーグルの世界」が終わる
第2章	グーグルが築いた「世界システム」とは?
第3章	グーグルの「ルーツ」を探る
第4章	限界を迎えた「無料」戦略
第5章	「グーグル後の世界」10のルール
第6章	グーグルの心臓「データセンター」の実情
第7章	「機械学習」は本当に成功するのか?
第8章	人間を超越した金融取引の秘密
第9章	AIは、人間を超えられない
第10章	シリコンバレーに新風を巻き起こす若者たち
第11章	ビットコインは「救世主」なのか?
第12章	ビットコインの創設者? クレイグ・ライトの主張
第13章	「グーグル後の世界」を牽引する企業の誕生
第14章	「インターネット」をグーグルから奪還せよ!
第15章	「プログラミング言語の生みの親」の挑戦
第16章	縁
第17章	「スカイ・コンピューティング時代」の幕開け
第18章	アメリカの「進化」を阻む大学教育の弊害
第19章	通信業界の規制を乗り越えろ!
第20章	グーグル帝国の逆襲
第21章	ビットコインには「欠陥」がある?
第22章	大規模な「アンバンドリング」

供する。哲学的には、限界費用ゼロ社会の実現を目指している。それは、広告収入に依存するモデルで、ユーザーは見たくもない広告を見るために時間を浪費することになる。後者は、ブロック・チェーン等の分散処理を前提とし、ユーザーに対するサービスは必ずしも無料とはならない。有料ならば広告主の意向を最大限尊重する必要はなく、ユーザーは広告を見る時間を節約できる。

肩透かしを食ってしまった。具体像はなくとも、次のような指摘は可能だ。著者は集中処理＝無料、分散処理＝非無料という前提を置くが、現在、クラウドの99・9%は分散環境下にある。また、ブロック・チェーンは分散データベースだが、データの計算主体は特定のデータセンター内に構築されたシステムで、その意味で集中している。グーグルがユーザーと広告主の間で均衡を保ちつつビジネスを展開しているのは周知の事実だが、前述のように、分散、集中とグーグルのモデルとの関係は明確ではない。それでも、著者の洞察力、取材力は素晴らしい。本書は一読に値する。グーグルがなかなか消えない理由の掘り下げがあると、なおよかった。

著者は、一種のパラダイムシフトにより、グーグルの無料モデルに限界が来ることは明らかだという立場を取る。予測の信憑性を検討するためにも、スカイ・コンピューティングの具体像の描出を期待したのだが、後半は米国の通信規制問題などに費やされ